フォーラム
共通知をひらく

# リスク社会を見る目

酒井泰弘

岩波書店

フォーラム
共通知をひらく

# リスク社会を見る目

酒井泰弘

岩波書店

**酒井泰弘**

1940年大阪生まれ．神戸大学経済学部卒業，ロチェスター大学大学院博士課程終了(経済学博士)．ピッツバーグ大学助教授，広島大学助教授，筑波大学教授などを経て，現在は滋賀大学特任教授，龍谷大学経済学部教授，筑波大学名誉教授．日本リスク研究学会会長，日本地域学会会長，生活経済学会会長，ニューヨーク大学日米経営経済研究センター研究理事，日本学術会議会員などを歴任．主な著書に，『不確実性の経済学』(有斐閣，1982年)，『寡占と情報の理論』(東洋経済新報社，1990年)，『リスクと情報』(勁草書房，1991年)，『リスクの経済学』(有斐閣，1996年)，『リスク，環境および経済』(共編著，勁草書房，2004年)などがある．

フォーラム 共通知をひらく
リスク社会を見る目

2006年9月26日　第1刷発行

著　者　酒井泰弘（さかい やすひろ）

発行者　山口昭男

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三陽社　カバー印刷・NPC　製本・牧製本

© Yasuhiro Sakai 2006
ISBN 4-00-026347-1　　Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写は，日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい．

# はしがき

『功名が辻』というテレビ・大河ドラマが、人々の間で大変な評判を呼んでいる。ドラマの原作は国民的作家・司馬遼太郎氏による同名の小説であるが、その舞台ははるか四百年前、わが郷里に近い北近江(滋賀県北部)である。

主人公の山内一豊は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康という三人の天下人に無事仕えることのできた唯一の男とされる。浮沈の激しい戦国時代において、出自も風貌も性格も全く異なる三人の武将の要人として生き抜くことは、「ミッション・インポシブル」に近い至難の業であったように思われる。

一豊を背後で支えたのが、夫のために名馬の購入資金として金十枚を差し出した、賢妻の千代である。現代の言葉でいえば、一豊と千代の両人は、リスク・マネジメントの才能に非常に長けていたというべきだろう。

私の家内の先祖は、徳川家の重臣である井伊直政に仕えていた。それから四百年の星霜が流れ、私たちは四年前に彦根芹橋の組屋敷に戻ってきた。彦根は美しい天守閣を中心に城下町の佇まいを色濃く残す、古くコンパクトな町である。私たちは、それ以前の二十四年間、新しく人工的な筑波学園都市に住んでいたから、生活環境の余りにも大きな違いに当初戸惑った。だが、郷里に勝る住処は他に求めようがなく、かかる「家族大移動」は挑戦するのに十分値するリスクであったと自負している。

四百年前と二十四年間と四年前――私の人生の岐路は、「四」という数字に不思議に絡んでいるようだ。序ながら、私自身がリスク研究を本格的に始めるきっかけを作ったのが、ほぼ四十年前の出来事である。場所はアメリカ東部のピッツバーグ大学、対話の相手はゲーム理論で有名なモルゲンシュテルン教授である。若いサカイは、思い切って次のように尋ねた。

「先生、自分は経済学の現状に満足できません。何か新しい方向はないでしょうか？」

「ミスター・サカイ。《リスクの経済学》という名の経済学が生まれつつありますよ。君は若いのだから、この新しい分野に挑戦されるといいでしょう」

この答えはいささか「想定外」であったが、私は持ち前の「根性」で挑戦することに決めた。友人の何人かは、「それは《リスキイ・ビジネス》だ。余り深入りしないほうが賢明じゃない？」とも忠告されたが、私の心は微動もしなかった。モルゲンシュテルン先生と私との出会いは、山内一豊と千代の出会いに比べるべくもないが、私の研究者人生を決定づけるものであった。

それから、四十年の歳月が経過した。私の関心分野は単なる「リスクの経済学」に止まるものではなく、隣接分野へと際限なく広がった。それはいわゆる文理融合の「リスク科学」の範囲にすら収まるものでもなく、諸科学から小説・歴史をも含む広大な「リスク関係学」へと無限に伸びて行ったのである。その伸びに伸びた興味の「枝」を束ねるべく、一冊の「根幹」の書物を書きたいと思っていた所に、岩波書店編集部の高橋弘氏からそのような本を書いてください、との有難い注文が来た。私はもちろん二つ返事で新著の執筆を引き受けることにした。

正直に言って、新著の問題点は内容や構成よりも、むしろタイトルのほうにあった。私は沈思熟考した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

結果、故都留重人氏の名著『経済を見る眼』(岩波新書、一九五八年)からヒントを頂いて、『リスク社会を見る目』と付けさせていただくことにした。都留氏は早くからアメリカの大学で学位をとられた大先輩であり、偉才ガルブレイスのベストセラー『不確実性の時代』(TBSブリタニカ、一九七八年)の訳者としても知られている。ガルブレイスと都留氏の両巨頭は近年相次いで他界された。衷心より御冥福をお祈りする次第である。

話は少し戻るが、私はゲーム理論の碩学モルゲンシュテルン先生との運命的な出会いによって、自分の主たる専門分野を「リスク学」ないし「リスク研究」に定めた。それまでの私は哲学と数学の間、文系と理系の間、近経とマル経の間、ミクロとマクロの間、理論と政策の間など、いろいろな「学際的谷間」のところで悪戦苦闘していた。だが、当時の学問的煩悩はリスク学との出会いによって不思議に霧消してしまった。こういう霧消の根本原因とは何かを突き詰めて考えてみると、思い当たることがあるのだ。それは大阪大空襲という、私自身の「人生の原点」なのである。

時は一九四五年三月十四日。大阪の空一面には、「ウワーン、ウワーン!」と空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響き、人々の間の日常生活を突然に打ち破った。当時五歳にも満たなかった私は防空壕の中にいたが、B29爆撃機から落とされた焼夷弾の嵐に抗しきれず、両親とともに近くのサル山に避難した。付近の家々の多くは焼け落ち、路傍には数多くの怪我人や死人と思しき人体が横たわっているのを目撃した。当時の私の生存確率は、無差別爆撃リスクのために相当に低かったのではないかと回想される。

日本は程なく戦争に負けた。私は慌しい戦後復興のなかで、大阪大空襲のことをなるべく忘れるように努めてきた。だが、戦時の異常な体験は、脳裡から完全に消し去ることは不可能である。実際、折に触れ

て、自分の「人生の原点」のことが想起されるのであった。ある日、推理小説の大ファンであった私は、松本清張の傑作『砂の器』(新潮文庫、一九七三年)を読んでいたが、そのとき次のような文章に出くわして、文字通り釘付けになってしまった。

「いつの空襲?」
「それが終戦間際の、昭和二十年三月十四日でしたな。B29が大編隊で来よりましてな。焼夷弾の雨ですわ。アメリカはんも、もうちょっと待ってくれはったら、この辺も助かりましたやろ」
「相当、人が死んだんだろうな?」
「へえ、そら何千人という人ですわ」

私の自分史の中には幼児のときから、生死ぎりぎりの戦争リスクのことが内蔵されているのだ。松本清張の推理小説を読むとき、自らの血潮が異常に波打つのを感じるのは、こういう戦争体験に起因するのではないだろうか。こういうことから、私が「リスク社会」に関する一般書の執筆を依頼されたとき、その第1章を松本清張のことから始めるのに何ら抵抗感はなかった。

ここで、本書の構成について述べておこう。序論部分としての第1章において、上記の個人的理由のために、清張の出世作『点と線』における推理のトリックとリスクが取り上げられる。しかも、イギリスの作家アガサ・クリスティの有名な作品『オリエント急行の殺人』と比較しながら、日本とイギリスの間におけるリスク対応の違いが鮮明になることを狙っている。

次の第2章は本書の総論部分である。リスク観は時代と風土とともに変遷するものであり、リスク自体の定義もそれとともに変化するものであることを明らかにする。「リスクはクスリ、クスリはリスク」というのが、私の基本的考え方である。リスクの存在を災害やモラル低下というような「マイナス面」だけで捉えては不十分であろう。適度のリスクは人間活動を活性化させる「クスリ」にもなりうる。リスクの持つこういう「プラス面」にも目を向ける必要があると思う。

第3章以下の諸章は、本書の各論部分を構成する。第3章では、三角形のロマンとリスクに注目しながら、大相撲の巴戦が百%公平とは言えないものの、非常にスリリングな決定戦であることが明らかにされる。第4章では、コインのオモテとウラに言及しながら、十八世紀の数学の天才ダニエル・ベルヌーイの「コイン投げゲーム」が紹介される。実は、現代のリスク研究は、このコイン投げゲームを深く分析し、一層展開させたものに過ぎない。まことに、人生は短く、学術は長いのだ！

第5章では、人間の性格もリスク観もいろいろであることが述べられる。人間の血液型にA型、B型、O型、AB型があるように、リスク対応の仕方にも「凹型」、「凸型」、「L型」、「凹凸凹型」、「凹S型」などの多様な型があるのが明らかになるだろう。第6章では、金子みすゞの感動的な童謡詩「大漁」を取り上げ、それをゲーム論の見地から多角的に解釈しようと試みる。「浜の祭りは海のとむらい」であるという、金子みすゞの澄んだ目が、現代リスク分析の中でますます光り輝くのを期待している。

最後の第7章では、二十世紀の人々の重要テーマであった「社会主義か資本主義か」という問題に分析の光を再び照射する。社会主義社会の中にも「品格のあるもの」と「品格の劣るもの」があり、資本主義社会の中にも「品格のあるもの」と「品格の劣るもの」がある、というのが私の現在の基本的スタンスで

ある。品格を忘れた社会が永遠に続くことはないだろう。「色即是空、空即是色」の教えは、現代のリスク社会の中でも通用すると信じている。

私たちはリスク社会に生きている。古くは「地震、雷、火事、親父」、今では「放射能、温暖化、ゴミ、エイズ」と言われるように、人間社会は実に多様なリスクに満ちみちている。たとえ同じリスクといえども、人間が違えば、リスク対応の仕方が違ってくる。そして、この点にこそ、客観と主観の違い、歴史と風土の違い、自然と社会の違いなどが鮮明に表われてくるのだ。

リスク社会を見る目は、決してひとつではない。複眼的であり、いろいろな視点から、多様な見方があってもおかしくないのだ。「リスクいろいろ、人間いろいろ、見方いろいろ」というのが、私の到達した結論である。読者が本書を読むことによって、そのリスク観やリスク分析方法をより一層広く、より一層深くしていただけるように願っている。

二〇〇六年盛夏、北近江湖畔にて

酒井泰弘

# 目　次

はしがき

第1章　推理小説のトリックとリスク……1
——アガサ・クリスティと松本清張

1　二人の巨匠——アガサと清張
2　『点と線』のトリックとリスク
3　『オリエント急行の殺人』のトリックとリスク
4　推理小説の魅力とリスク

第2章　リスク社会をどう見るか……23
——見る目はひとつではない

1　リスク社会の現実——世界と日本

2　リスク観は変化する
3　リスクとは一体何だろうか
4　リスクのない世界とリスクのある世界
5　リスク社会と「日本の危機」

第3章　三角形のロマンとリスク……63
——大相撲の巴戦はなぜ面白いのか
1　「三」という数字の魔力
2　三角形と三つ巴
3　大相撲の巴戦のロマンとリスク
4　巴戦と三角形の魔力は不滅だろうか

第4章　コインのオモテとウラ……91
——サンクトペテルブルクの夢のあと
1　コインのオモテとウラ
2　コイン投げゲーム——ダニエル・ベルヌーイの天才ぶり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3　期待効用基準のすすめ――ダニエル・ベルヌーイの解決法
4　人間の心理の微妙な動き――リスク評価理論との接点
5　「日本のダニエル・ベルヌーイ」を求めて

第5章　凹型人間か凸型人間か……121
――人間の性格もリスク観もいろいろ
1　司馬遼太郎と近江の自然・文化
2　人間の血液型と性格・行動
3　リスクを避ける人とリスクを好む人
4　同じ人が保険に入り宝くじを買う
5　名作『功名が辻』と人間ドラマ

第6章　金子みすゞの澄んだ目……151
――浜の祭りは海のとむらい
1　金子みすゞの童謡詩から受けた衝撃
2　みすゞの「大漁ゲーム」をどう分析するか

3　囚人のジレンマとその周辺
4　金子みすゞを現代に生かす

第7章　色即是空、空即是色……183
——ベルリンの壁は崩壊したが……
1　ブランデンブルク門の此方と彼方
2　社会主義対資本主義——「経済学の冷戦」とともに
3　社会システムとモラルハザード
4　色即是空、空即是色——品格のある生き方を求めて

あとがき
参考文献

# 第1章

# 推理小説のトリックとリスク

## ——アガサ・クリスティと松本清張

## 1　二人の巨匠――アガサと清張

### 推理小説は列車の旅の道ずれ

推理小説を読むのは、楽しいものだ。優れた推理小説には、自然があり、歴史があり、風土があり、知性があり、感情がある。色々な生きた人間の姿がある。それはまた、「リスク社会を見る目」を養う上で大変役に立つと思う。

現代人は忙しく、列車や電車に乗ることが多い。その際に、推理小説のページをめくる快感はこたえられないのだ。推理小説は、旅のよき道ずれである。私は長距離列車の中では、二〇〇ページ程度の読み切り小説を好んでいる。列車の進行と推理の進行が奇妙に重なりあって、程よい気分に浸れる。長いトンネルの中では、自分自身が名探偵の気分になって、来るべき事件の展開と解決を予想するようになる。

のぞみやひかりなどの新幹線車輛の中では、事件の組み立てが余り複雑でなく、鋭い推理力がスーッ、スーッと進められる読み物がよいようだ。他方、ローカル線の小さな旅では、短編のやや入り組んだミステリーを読むのが適しているように思える。電車の車輪がガタガタ音を発するごとに、事件の展開もガタガタ揺れて、意外な結末を迎えるのが堪らなく楽しい。

## 二人の巨匠を比較する

イギリスのアガサ・クリスティ(一八九〇―一九七六)と日本の松本清張(一九〇九―九二)――この二人は二十世紀を代表する推理作家である。しかも、二人の代表作がともに列車に関係する推理小説なのである。というのは、『オリエント急行の殺人』(一九三四年)はアガサの名作であるし、『点と線』(一九五八年)は清張の傑作であるのだ。

アガサの娘の息子マシュー・プリチャードによると、名作『オリエント急行の殺人』はアガサの最もお気に入りの作品のひとつであった。

「列車はつねにわたしの大好きなものの一つであった」

と、マシューの祖母、すなわちアガサは自伝の中で述べているという。旅は人生そのものであり、冒険でもあった。

清張の傑作『点と線』は、最初は雑誌『旅』に連載された(一九五七年二月から一九五八年一月まで)。これはある意味でマイナーな扱いであったが、作品の評判が次第に増してきた結果、連載完了とほぼ同時に、単行本が光文社から出版された。清張は年輪を重ねるとともに、内外の取材旅行をますます好んだ作家の一人となった。

二人の巨匠アガサと清張が駆使するトリックは、ともに新鮮で面白い。だが、そのトリックの構成と内容が二人の間で同じでなく、それぞれのお国柄とリスクを反映しているのは当然であろう。ここでは、私が専門とする「リスクと不確実性」の視点から、二つの推理小説がどのように違うのかを明らかにしたい

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com